

国連学会若手旅費助成報告書

宇都宮大学
藤井広重

11月7日から9日にかけて韓国のソウルで開催された第19回東アジア国連システム・セミナーに、国連学会若手旅費助成を賜り参加することができた。以下に、担当したセッションの様子と所感を報告する。

私が報告することになったのは、3日目の第3セッションのサブセッション第1部である。第3セッションのタイトルは「経済および文化的発展(Economic and Cultural Development)」であり、サブセッション第1部では「SDGsの地域での実践(Local Implementations of SDGs)」をテーマに、司会を中国国連協会のWANG Ying 副理事長が務めた。私は、最初に報告を行い、「目標」であるSDGsが日本社会において非常に魅力的なツールとして活用されている実態から、その背景と地域社会が受容するプロセスや課題について、アンケート調査の結果等から明らかにした。特に、SDGs達成に向けた具体的なプロジェクトを地域コミュニティが実践していくための大学が果たしうる役割について明確に指摘できたことは本研究報告の成果であると考えている。しかし、私自身が宇都宮市で立ち上げ、関わっているSDGsのプロジェクト自体は、これから様々なアウトプットが期待できるため、今後もさらなる検討が必要である。再び登壇の機会を頂けるようにプロジェクトベースの本研究を進めていきたい。

続いての韓国外国語大学のYoungwan Kim氏と中国国際発展知識センターのHUA Ruoyun氏が報告を行ったが、両者ともに異なる視点から、アフリカにおけるSDGsの実践例について中国を中心とした外部アクターの課題と成果について言及した。中国によるアフリカでの開発事業については、異なる立場から様々な意見が出され、まさに国際会議の醍醐味ともいえる活発な主張が交わされた。本話題は、閉会時に設けられたフリートークのセッションでも言及され、参加者からの関心の高さも伺うことができた。

以上、私を含めた本サブセッションの三者の報告は、研究対象地域は異なるが国際的な規範と地域での実践にギャップが存在しているとの共通の理解に基づいていたと言えよう。

19回目の開催を迎えた東アジア国連システム・セミナーは、すべてのセッションで時間が足りないくらいに活発な意見交換が行われることが大きな特徴と言える。そして、これらの活発な議論を支えているのが、研究者のみならず実務経験者の知見であろう。今回も先行研究に対する批判的考察から現実に発生している喫緊の課題にまで、幅広い射程で議論が進められ、非常に魅力的な知的交流の場となった。2020年日本で開催される第20回東ア

ジア国連システム・セミナーにおいても、国連研究に従事する日中韓の専門家によって多角的かつ建設的な議論が交わされることが大いに期待される。貴重な機会を賜った国連学会の皆様には心からの御礼を申し上げます。